

第2章

人類・地球が抱える課題

議論を行うに際しては、地球社会が直面している種々の困難の現状を

俯瞰的に把握することが大切である。

次のように課題を整理した。

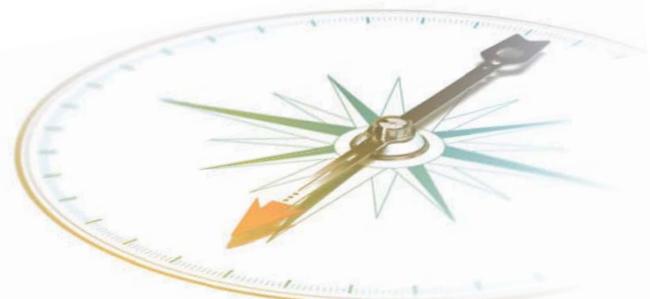


1. 持続可能性の必要性

人類と地球が直面している諸課題は、グローバリゼーションによる国や地域の文化や特性を考慮しない画一化の進展と、地球の有限性、資源や環境、そして人知の限界を考慮しないまま、「成長」と「競争」を継続してしまったことに起因している。また、多様性を理解し、受容できないことによる矛盾は、ますます深刻化している。

金融資本主義とグローバリゼーションが世界を席巻した結果、1972年のローマクラブによる『成長の限界』が指摘した環境問題や資源枯渇は悪化し、貧困は解消せず、経済格差は国家間のみならず人々の間にますます広がり、テロの温床が生み出されつづけ、紛争は絶え間なくつづいている。人類と地球は、平和共存はおろか、今のままでは持続不可能な方向に向かっていると懸念せざるをえない。

今日の世界は政治的混迷、軍事紛争の拡大と不確実性の増大、経済的危機の頻発、科学技術の急激な発展の下で、人間の生き方の本質、倫理、道徳などが軽視され、「人類の幸福」や「持続可能で住みやすい地球」が失われつつある。今、人類社会は単一的な「進歩発展」といった考え方から「人類の平和的・持続的共存」という考え方への転換の分岐点にあり、これまでの歴史的な趨勢を転換することが必須である。



2. 課題の複雑化・不確実化

高等研設立から30年が経過した。この間、日本および世界のありようが、歴史的に大きく変化している。資本主義の暴走、民主主義の限界、少子高齢化など、社会経済的課題はますます複雑かつ不確実になっている。

人類と地球全体の将来を考えた時に、経済的価値の追求だけでなく、それ以上に、人々の幸福や社会の安寧への価値観の転換が重要となっている。こうした現代的課題を、先進国も途上国も十分に認識せず、この方向転換への努力を怠っている。発展途上国は、先進国が進めてきた負の遺産に学ばず、有害廃棄物のことを考えない持続性の欠けた工業化、金融資本主義的な方向で繁栄を求め、人口も増加している。こうした地球規模でのインバランスが今後数十年は継続することが懸念される。

社会的課題は矛盾やトレードオフ関係を内包しているため、一意的に回答を得ることはできない。個々の実践事例を積み上げながら、人類と地球の持続的な未来を実現する方策を探求していくという価値観と行動様式が求められる。

3. 歴史観と世界観の重要性

人類はルネッサンス以降、近代化による発展を成し遂げてきたが、経済的価値のあくなき追求は、人類・生物・資源・環境等の持続性への配慮を稀薄にした。

また、極端な市場中心主義の下で、評価の軸は経済的価値に重点がおかれ、経済合理性を過度に追及してきたことによる弊害が今や頻出し、人類と地球の生存にとって危機を迎えている。このため、教育・学術・科学技術・文化・医療・安全・自然・資源・景観など、生活の質の向上、社会的な安寧に寄与する分野への投資に配慮する必要がある。

こうしたルネッサンス、産業革命以来の近代の趨勢を、新しい歴史観と世界観をもって大きく転換することが求められる。「有限な地球上で、すべての人々が平和的に共存していくにはどうしたらいいか、その中で日本の役割は何か」を考え、実践する方向に大きく舵を切る時期を迎えている。

阪神・淡路大震災や東日本大震災という未曽有の自然災害が、経済大国で起こったということは世界史的に非常に稀なことである。この大災害が引き起こした困難を、21世紀の新たな価値観やソフトパワーを創造することによって克服する中から、日本は、それがもつ意味を世界に周知させることが大切である。これが、復興にあたって日本が支援を受けた国々と人々に対する恩返しでもある。

4. 進歩史観の転換

「科学的進歩・経済的発展」という近代の概念が一義的には成り立たない時代を迎えて、科学技術を人類と地球の持続性・平和と幸福のために使用するという視点に立ち、さらに、科学技術だけで人類・地球が抱える課題を解決できないという時代（トランスクロス・サイエンス時代）を迎えて、科学技術だけでなく、倫理・思想・哲学・歴史・文化・芸術などを重視して、協働して、課題の解決にあたるという基本に立つ必要がある。



Trans-Science

